関西学院大学リポジトリ
Kwansei Gakuin University Repository

<シンポジウム>地中海と近世史

著者	坂本 優一郎
雑誌名	関学西洋史論集
号	43
ページ	1-3
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028521

〔シンポジウム〕

地中海と近世史

坂　本　優一郎

空間という視座から言えば、近年の歴史学では、一方で社会史を主体とするミクロな空間的な設定による実証研究が積み重ねられ、他方、経済史を中心とした「グローバル・ヒストリー」によって、マクロな空間把握が進展しているといえる。

すくなくとも20世紀のある段階まで歴史学の主流だったのは、「国史」すなわち「ナショナル・ヒストリー」であった。それは近世に誕生した主権国家の領域別に研究対象が編成された空間のとらえかたであった。たとえば、経済史研究では国家はほぼ自明の経済単位（「国民経済」）とされた。ヒト・モノ・カネ・情報が急激に世界的に移動した19世紀後半における「世界経済」なるものが分析の対象とされても、それはあくまで国民経済の集成体としての「世界経済」にすぎなかった。また、社会経済史にとって代わるかたちで20世紀後半に隆盛を極めた社会史でも、まずは国家という空間枠組みが分析の前提とされたといってよい。国家という空間を前提にしつつ、ミクロで具体的な歴史像を問うなかで、地域、村落などのように、空間をより微視的に設定し、社会のありかた、権力の関係、生活の様相を実証する傾向が強まった。こうして、かっての「教条的」な社会経済史ではえられなかった、具体的で精彩に富む豊かな歴史像を手にしてきたのである。

他方、20世紀末から21世紀初頭にかけて新たな潮流として浮上してきたのは、既存の主権国家という空間領域を前提としない、国家よりもより大きな空間を前提とするいわゆる「グローバル・ヒストリー」であった。当初はディシプリンとしては未成熟で枠組みのみ先行しているのではないかという懐疑的な

声も聞かれた「グローバル・ヒストリー」であったが、最近では実証的な研究もあらわれており、1980年代からのグローバル化の進展と呼応して、今後一層の飛躍の可能性を期待できる分野となった（もっとも、「グローバル・ヒストリー」と題するものの、依然としてもっぱらヨーロッパ語史資料に依拠する側面がきわめて強いという欠点は指摘できる）。

それでは、どのようにすれば、こうした二極化傾向を架橋できるのであろうか。言い換えると、微視的な社会のありかたに関する研究の蓄積や手法の洗練化と、ダイナミックな空間の把握を接続すると、どのような新しい空間のとらえかたが可能になるのであろうか。

このシンポジウムでは、かつてフェルナン・ブローデルが切り拓いた「地中海」を対象にしたい。本シンポジウムが実施されたのはブローデルが地中海という構想を公にしてからちょうど70年後にあたるが、このシンポジウムでは地中海の「海」としての特性をより強調しつつ、近世という時代を中世史と近代史から眺めるとともに、ヨーロッパ圏とイスラーム圏との接続も視野におさめるかたちで、「海」としての近世地中海という時空間の歴史的な意義を探りたい。そのために、シンポジウムの報告者として、ヨーロッパ中世史、近世オスマン帝国史、近代イギリス史をそれぞれ専門とする研究者にご登壇願い、それぞれの専門から見た近世地中海像をご提示いただいた。

第一報告は佐藤公美（甲南大学）「海とイタリア同盟――15世紀後半イタリア半島領域国家間システムにおける地中海――」である。佐藤報告では西洋中世史の立場から中・近世移行期における地中海のとくに北岸を中心とする政治・社会・経済秩序を規定することになる「イタリア同盟」が取り上げられる。第二報告は堀井優（同志社大学）「近世前期の東地中海――オスマン帝国・ヴェネツィア間の条約体制と商業特権――」である。堀井報告ではオスマン帝国史の立場から条約によるシステムによって16世紀にオスマン帝国とヴェネツィアとの経済秩序と政治的な枠組みとの関係が規定され、それが近世東地中海における商業秩序形成の一部につながることが論じられる。第三報告は金澤周作（京都大学）「パックス・ブリタニカ前夜の西地中海――マグレブ・

虜囚／奴隷・大西洋――」である。金澤報告ではイギリス近代史の立場から、著名な大西洋奴隷貿易に比すべき「もう一つの奴隷貿易」を手掛かりに、一種商業的な人身の交換にかかわる秩序のありかたが、西地中海域におけるキリスト教圏とイスラーム教圏との相互関係を通じて、宗教の相違を越えて構築されていたことが具体的に示される。

このように地中海の「海」としての特性を前面に押し出しつつ、佐藤報告で地中海の北岸、堀井報告で地中海東域、金澤報告で地中海西域をカバーすることで、「海」としての近世地中海の歴史的な意義あるいは時空間のもつ意味がバランスよく解き明かされるはずである。これはとりもなおさず、ミクロな実証研究の成果とマクロな空間的な構想力との有機的な接続であるとともに、近世に姿を現し始める「ナショナル」な空間の存立条件の「海」からの問い直しであり、さらにはヨーロッパに典型的にみられる「一地域中心史観」を乗り越える試みであるともいえよう。

参考文献

Fernand Braudel, *La Méditerranée et le Monde Méditerranéen a l'époque de Philippe II,* Armand Colin 1949（浜名優美訳『地中海』、藤原書店、1999 年）.